

第Ⅳ章 まとめにかえて——志戸平遺跡出土の甕・壺に関する検討——

第1節 はじめに

志戸平遺跡と頭田遺跡では弥生時代を通しての土器が多数確認できている。頭田遺跡では土器の点数、残存状況ともに良好なものが少ないので、ここでは志戸平遺跡出土の弥生土器のうち、出土点数の多い甕・壺についてその前後関係を提示しままとめにかえたい。

第2節 南九州弥生土器研究の現状

鹿児島県薩摩半島の南端に位置する指宿市橋牟礼川遺跡は、大正7・8年に浜田耕作、長谷部言人らによって発掘調査され、縄文土器と弥生土器の年代差が層位学的に立証された初めての遺跡である（下山覚・渡部徹也 1991）。このような記念碑的な遺跡を持ちつつも、南九州の弥生時代研究は長らく停滞していたといっていいだろう。ここでは、南九州弥生土器編年研究の研究史を大まかではあるがたどってみたい。

南九州の弥生土器編年は、小林行雄・杉原莊介によって編集された『弥生式土器聚成図録』の河口貞徳のもの⁽¹⁾がその初出であろう。以後精力的に南九州の弥生土器編年を行った河口は、『弥生式土器集成

本編』（河口 1964）や「南九州弥生式土器の再編年」（河口・出口 1971）を経て1981年の「新南九州弥生式土器編年」（河口 1981）を発表するにいたる。河口のこの編年案の提示により、南九州の弥生時代研究は明確な時間軸を得ることとなる。しかしながら河口編年は、1997年に中園聰による編年案（中園 1997）が提示されるまで、大した批判や検証をうけることはなかった。石川悦雄（1983・1984）や中村直子（1987）等による地域や時間を限った論究はあったものの、南九州の弥生土器編年研究は停滞ていたといっていいだろう。中園が編年案を提示して以降、南九州の内部から目立った検討が加えられていない現状をみると、この停滞は現在もまだ継続しているとみてよいのかもしれない。石川の「問題意識の欠如しているところには、良好な資料も又求むべくもない」（石川 1984）という厳しい批判は、今日まで生き続けているといえる。

翻って、宮崎県下の弥生土器研究をたどっていくと、石川（1984）の論文以来、大系だったものは何一つできていないのが現状である。いくつかの報告書（長津 1985・北郷 1988）に編年案が提示されたものの、編年根拠が不明確であったり、単に石川編年のトレースに遺跡での新資料を追加したものであったりと、「多少の誤謬を犯す危険は承知の上で、急務とされる自前の弥生土器編年の叩き台」として提示した本人の意思とはうらはらに、石川編年は完成品として受け取られそれを補強あるいは検証しさらなる深化を求める動きは生まれてこなかった。これは、石川自身が指摘するように、「在地の研究者の不足」と「問題意識の欠如」が大きな要因であろう。近年になり、ようやく弥生土器編年に対する再検討の気運が高まりつつある（桑畑 2000①②③・松永 2000）。石川により提示された弥生土器研究（弥生時代研究と言い換えてもいいだろう。）の課題は、まる15年を経てようやく検討され始めた観がある。

註(1)河口 1964 による。諸々の事情により原書にあたることができなかった。

第3節 志戸平遺跡出土の甕・壺に関する検討

志戸平遺跡では、夜臼式や板付式に併行すると思われるものなどから、古墳時代に至るまでの土器が出土している。洪水砂のなかの一括資料ということもあり、様式の設定や時期の決定は困難であるが、他遺跡での供伴関係や先行研究を参考にして可能な限りこれを行ってみたい。